

土左日記の冒頭文について

— 小松英雄説批判 —

徳 原 茂 実

はじめに

小松英雄氏は著書『古典再入門』『土左日記』を入りぐちにして（平成十八年十一月 笠間書院刊）において、『土左日記』の冒頭文を作者による女性仮託宣言と読み解く通説を否定し、日記を「男文字」ではなく「女文字」で書こうという作者の意図が表明されているとの新解釈を提唱した。この新解釈については、東原伸明氏が同書の書評で適切な批判を加え、その後、熊谷直春氏による徹底的な批判もあつて、小松氏の新解釈が成立し難いことは、『土左日記』に関心を抱く研究者の間では常識かと思う。

しかしながら、熊谷氏の論考は広く人目に触れていないようだし、一方、小松氏の知名度の高さも手伝ってか、高等学校の国語科教員や、専門を異にする研究者の中には、小松氏の新説を信奉するむきがあると仄聞する。国語科教育の現場において小松氏説が紹介され、生徒に無用の混乱をもたらすことがもしあるならば、ゆゆしい事態であると言わねばならない。本稿では、熊谷氏の論考の紹介をも交えながら小松氏説に批判を加え、『土左日記』が、女性主人公によって書かれた日記というスタイルで創作されたフィクションであることを確かめたい。

一、「をとこもす」「男文字」なのか

『土左日記』の冒頭文を、青谿書屋本によって掲げる。^(注3)

をとこもすなる日記といふものをむなしてみむとするなり

小松英雄氏はこの「一次的仮名連鎖」の中に「をとこもし」(男文字)と「をんなもし」(女文字)という「二次的仮名連鎖」が重ね合わせられて「複線構造」をなしていると主張している。そして「析出された二つの二次的仮名連鎖によって表わされる「男文字」と「女文字」とが、この作品の本質に関わるキーワードですから、それらを前面に立てると、前文の趣旨は(日記を男文字ではなく女文字で書いてみよう)という意味に理解すべきことになります」と主張している(同書一〇八ページ)。なお、小松氏のいう「前文」は『土左日記』の冒頭文をさしている。

ところで、「をとこもす」がなぜ「をとこもし」に化けるのか。小松氏の説明は次の通りである。

五文字の仮名連鎖は、五音節語に対応しているので、四番目の仮名までが一致していて、最後の一文字の聴覚印象が近似していれば、二次的仮名連鎖によって表わされる語形を喚起するのは当然です。意味をもたない仮名連鎖「をとこもす」は意味を持つ仮名連鎖「をとこもし」を喚起します。

(二〇七ページ)

熊谷直春氏は右の文章を引用した上で、次のように批判している。

確かに「す」と「し」は、「聴覚印象が近似」している。私は東北人であるから、この点についてはよくわかる。しかし、『土左日記』は書かれたものである。「聴覚印象が近似」は通用しない。我々東北人でも、書く段になれば、「す」と「し」を混同して書いたりはない。因みに言えば、『古今集』巻第十には物名の歌が四十六首収められているが、右のような「聴覚印象が近似」している物名を読み込んだ歌は一首もない。書いたものだからでもある。

熊谷氏はこのように述べ、「（小松氏の）理論は冒頭文に限って言えば間違っている」と批判した。続けて熊谷氏は、次のような「素朴な疑問」を提示している。

下の方（をんなもし）から、上の方（をとこもす）の「す」を「し」に喚起することがあるだろうかという疑問である。つまり、上から下を喚起することはありうることもかもしれないが、下から上へとは常識的には考えられないということである。

いずれもきわめて適切な批判であり、間然するところがない。小松氏説が成り立たないことは、これだけでも明らかではないだろうか。

二、「食べ終わった弁当の箱」の行方

熊谷氏による批判は至極まっとうなものであり、熊谷氏の論考を読んでも、小松氏説に対するこのような疑問はたれしも抱くだろうと思うのだが、意外なことに小松氏説信奉者が少なくないようなので、ここではあえて、小松氏の主張する通り、冒頭文からは「二次的仮名連鎖」として「男文字」「女文字」の二語が「析出」されると仮定し、それならば「女性仮託」

が否定されるのかどうか、検証を試みよう。

先に引用したように、小松氏は「析出された二つの二次的仮名連鎖によって表わされる「男文字」と「女文字」とが、この作品の本質に関わるキーワードですから、それらを前面に立てると、前文の趣旨は、〈日記を男文字ではなく女文字で書いてみよう〉という意味に理解すべきことになります」と述べている。しかし、この二語からどうして「日記を男文字ではなく女文字で書いてみよう」という意味が導き出されるのであろうか。しばらく小松氏の御論につきあってみよう。

小松氏は「仮名連鎖の複線構造」を説明するために『古今集』巻第十の物名歌「わかやとの はなふみしたく とりうたむのはなけれはや ここにしもくる」（小松氏の引用のまま）を取り上げている（八三ページ）。氏はこの一首について「わたしの家の花を踏みつけてだいなしにする鳥を叩いてやろう、野はないからなのだろうか、ここにばかりやって来る、という一次的理解では実にくだらない内容の和歌ですが、どこかに、この内容にかかわる語句の仮名連鎖が隠されています」と述べ、「りうたむのはな」（龍胆の花）という「二次的仮名連鎖」が隠されていることを種明かししたあとで、次のような瞠目すべき一文を書き付けている。

舌を巻くほど巧みな重ね合わせの技巧を十分に堪能すれば、詩的感動の片鱗すらない一時的仮名連鎖は、食べ終わった弁当の箱と同じで、もはや用がありません。（八四ページ）

「詩的感動」を犠牲にし、歌意の不自然さに目をつぶってもいいならば、この程度の言語遊戯は容易であって、「舌を巻くほど巧みな重ね合わせの技巧」とはいくらなんでも誉め過ぎではないかと思うのだが、それはさておき、問題は「詩的感動の片鱗すらない一次的仮名連鎖は、食べ終わった弁当の箱と同じで、もはや用がありません」という主張である。これについては東原伸明氏が「二次的仮名連鎖は、一次的仮名連鎖があって初めて存在しうる」「小松が例示した「物名」部立で言えば、「と

りうたむのはなければや」という一次的仮名連鎖と「りうたむのはな」という二次的仮名連鎖とは、対でなければ「物名」は「物名」としての、部立としての意味をなさない」と、適切に批判している。確かに「一次的仮名連鎖」があつてこそその「二次的仮名連鎖」なのであり、「りうたむのはな」という言葉だけを見つめていても、面白くも何ともないのである。

小松氏は同じたとえを『土左日記』冒頭文にも適用し、次のように述べている。

「をとこもし」、「をんなもし」というふたつの二次的仮名連鎖を取り出したあとの一次的仮名連鎖は、まえと同じたとえを繰り返すなら、食べ終わった弁当の箱のようなものですから、そのことについて議論する意味は失われてしまいました。

(一〇九ページ)

「食べ終わった弁当の箱」は無用のゴミとの趣旨であろうが、そうはいかない。仮に「男文字」「女文字」という二語を「析出」したところで、冒頭文は厳として存在する。それについて「議論する意味」があるかどうかはともかく、「男も書く」と聞いている日記というものを、女であるわたしも試みてみようと思つて書くのである(菊池靖彦訳)といった意味を担う「一次的仮名連鎖」は、小松氏がいかに「食べ終わった弁当の箱」と貶めようとも、存在をやることはない。

ここで先ほどの疑問が浮かび上がる。冒頭文の「二次的仮名連鎖」として「男文字」「女文字」の二語の存在を仮に認めるとしても、どうしてそれが「日記を男文字ではなく女文字で書いてみよう」という意味になるのであろうか。「日記を」「ではなく」「で書いてみよう」という文言はどこから湧いてくるのであろうか。小松氏は「食べ終わった弁当の箱」をゴミ箱から引っぱり出して再利用しているようにしか思えないのであるが、いかがなものであろうか。なお、氏が「二次的仮名連鎖」と主張する二語をしいて「一次的仮名連鎖」の中に挿入すると、「男文字なる日記といふものを女文字でみむとするなり」となり、文を成さない。「女文字」のあとに動詞「し」が脱落しているとする説がかつて存在し、それに南波浩氏が説得力ある批判を

加えたいきさつについては、熊谷氏の論考に簡潔に紹介されている。

以上、「をとこもす」から「をとこもし」（男文字）なる「二次的仮名連鎖」が「析出」されるとする小松氏の説に仮に従ったとしても、「日記を男文字ではなく女文字で書いてみよう」という意味は生じないことを述べてきた。ただし熊谷氏も言うように、「をとこもす」から「をとこもし」が「喚起」「析出」されることはありえないのであるから、本節は無用の議論と言えようが、小松氏説信奉者へのダメ出しとして、あえて贅言を弄した次第である。なお、「をんなもしてみむ」から「女文字」という語彙が「析出」されるという説に関しては、これを一概に否定することはできない。次節ではこの問題について考えてみたい。

三、物名歌のルール

菊池靖彦氏は『古今集』の物名歌についての論考^{（注4）}の中で、「物名歌は与えられた物の名を詠みこみながら、しかも表面上は歌意が通っていないなければならない。表面上はなるべく物の名がかくれて見えない程、成功作とされるであろう。さりげない中にふと物の名が見えるとき、その意外性に機知の楽しさをおぼえるのである」と述べ、「物の名を詠みこみながら、しかも普通の歌として十分な評価に堪えるもの」として、次の三首を挙げている。

しのぶぐさ

紀のとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞちりける（四四六）

かみやがは

つらゆき

むばたまのわがくろかみやかはらむ鏡のかげにふれる白雪（四六〇）

よどがは

つらゆき

あしひきの山辺にをれば白雲のいかにせよとかはるる時なし（四六一）

これらのほかにも、次のような作も「物の名を詠みこみながら、しかも普通の歌として十分な評価に堪えるもの」であると思う。あえて物名題を示さずに掲げよう。^(注5)

あしひきの山たちはなれゆく雲のやどりさだめぬ世にこそありけれ（四三〇）

空蟬のからはきごとにとどむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき（四四八）

うばたまの夢になにかはなぐさまむつつにだにもあかぬ心を（四四九）

いずれも歌意に不自然さがなく、詩情をたたえた秀歌であろう。小松氏が「仮名連鎖の重ね合せ」の例を、「一次的理解では実にくだらない」と評する「りうたむのはな」題の一首ではなく、もしこれらの中から選んでおれば、氏の『土左日記』冒頭文の理解も少なからず変わったものであったかもしれない。

ところで、菊池氏は同じ論考の中で、『古今集』の物名歌が詠まれるのは「人々の集いの場でのことであつた。難題であればあるほど、それをこなせば一場のかっさいを博している様子が想像されてくるのである」と述べている。勿論、全ての物名歌がそうであつたとは言えないだろうが、物名歌の創作と享受の場が存在したことは、おおむね認めていいと思うのである。菊池氏がその例として挙げるのは、贈答の場面（四二四―四二五）、即興の詠歌を楽しむ場面（四四五、四五六、四六八）などであるが、次の例などにも、物名歌を楽しむ集いの場の雰囲気^(注6)が、感じ取れるように思うのである。

ささ まつ びは ばせをば

きのめのと

いささめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつつ（四五四）

なし なつめ くるみ

兵衛

あぢきなしなげきなつめそうきことにあひくるみをばすてぬものから（四五五）

女性を交えた、あるいは女性だけの集いの場で、前者は庭の植物の名を、後者は参会者に供された果物の名を、できる限り多く詠み込むという条件のもとで、ゲーム感覚で詠まれた物名歌の中の優秀作だったのではないか。その場の人々の興奮が伝わってくるように思うのであるが、いかがなものであろうか。

ところで、人々が集いの場で物名歌を楽しむにあたっては、共通のルールが形成されていたにちがいない。まず、出題に忠実に従うというのは当然のルールであつたはずで、たとえば「をみなへし」題なのに「をみなへす」としか詠めず、「をみなへし」が喚起されるから一字くらいまけてくれ」などと言うのはルール違反であり、ゲームの感をそぐこと著しい。もちろん『古今集』巻第十物名には、そのような欠陥品はない。先に引いた熊谷氏の論考に「『古今集』の物名歌の中には「聴覚的印象が近似」している物名を詠み込んだ歌は一首もない」とあるのはこのことを言っている。

さて、『古今集』の物名歌をくり返し読んでみると、もうひとつのルールが見えてくるように思う。それは、「一次的仮名連鎖」と「二次的仮名連鎖」（物名題）に、同じ語彙を使用してはならないというルールである。たとえば、「よどがは」（淀川）題の物名歌において、「一次的仮名連鎖」の中に「淀」あるいは「川」という語彙を使用してはならないということである。下手法をでっちあげて恐縮であるが、「はなかくせよとかはざりはたつ」（花隠せよと川霧は立つ）という歌句には「よとかは」という文字列が存在するが、「川霧」と「淀川」とは同じく「川」を構成要素として持つから、これは「淀川」題の物名歌としてはルール違反なのである。一方、先に引いた『古今集』の「よどがは」題の物名歌は「……いかにせよとかはる時なし」

(四六二)であって、「淀」とも「川」とも詠まれておらず、ルールに違反していない。『古今集』と『拾遺集』の物名歌の中に、このルールに抵触している歌は一首も見出すことはできない。

『土左日記』冒頭文の「女もしてみむ」から「女文字」という「二次的仮名連鎖」が「析出」されるという小松氏の説に關して言えば、「女」という語が両「仮名連鎖」に重出しているから、これを物名歌の技法と見るならばルール違反である。もし「女もしてみむ」の部分に「女文字」という語を重ねるとというのが作者の意図であつたとするならば（意図はなかつたと思うが）、それは「船路なれどむまのはなむけす」「しほうみのほとりにてあざれあへり」（十二月二十二日条）に類した駄洒落と解しておけばいいのではなからうか。

四、「男もすなる」は伝聞である

小松氏は著書の「あとがき」に先立つ文章「お読みいただいたかたがたへ」の末尾において、「本書をまじめに読んでくださつたかたがたは、せめて、『土左日記』の前文を例にして二種類の助動詞ナリの違いを生徒に教え込むことはやめてほしいと願っています」と述べている（三三〇ページ）。「男もすなる」の「なる」は終止形接続の助動詞「なり」で、伝聞推定を表わし、「女もしてみむとするなり」の「なり」は連体形接続の助動詞「なり」で断定を表わす、というのは古典学習の常識である。「こんな短い文に二種類のナリが使われていますから、この前文は、ふたつのナリの違いを覚えるための例文として、教室で重宝に使われています」（五二ページ）と小松氏が言う通りなのである。ところが、それを著書の結びに「やめてほしいと願っています」とまで氏が念を押すのは、「男もすなる」の「なる」にかかわる、次のような考え方にもとづく。重要な論点なので、長い引用をお許しいただきたい。

『土左日記』のテキストは、日付が変わるごとに改行されており、どの日付も目立つように漢字で太く書いてあります。漢字文の日記は、参照したり確認したりする必要が生じた場合のために事実を記録しておくことが目的ですから、日付は検索のインデックスとしての機能を持っています。『土左日記』の日付が漢字文の日記と同じ形式になっていることは、その形式を踏襲したものと考えるべきです。この一事だけ見ても、『土左日記』の書き手が漢字文の日記を実見した経験を隠そうとしないことは確実です。したがって、「男もすなる日記」のナルが伝聞を表わしているという説明は成り立ちません。ほかに証拠はいくつもありますが、それぞれに細かい証明が必要なのでここには省略します。

伝聞・推定ではなく、筆者が提示した機能を担っているものとみなすなら、この場合のナルを説明できるわけでもありません。ここで考えられるのは、①終止ナリについてのこれまでの説明に大きな誤りがあるか、さもなければ、②この事例の場合、なんらかの理由で、終止ナリの機能を無視して、「男もすなる日記」と表現しているか、そのどちらかと考えなければなりません。もしも①だとすると、他のすべての用例が従来 of 伝聞・推定、あるいは確認していないための不確かさの表明として説明可能であるのに、ただこれだけが例外になるのはあまりにも不自然なので、②と考えるべきです。そうだとすれば、終止ナリの機能を無視してまで、「男もすなる日記」と表現している理由を説明しなければなりません。

(六〇～六一ページ)

『土左日記』の冒頭文では、作者は「終止ナリの機能を無視してまで、「男もすなる日記」と表現している」というのが右引用文における氏の結論であって、それが「せめて、『土左日記』の前文を例にして二種類の助動詞ナリの違いを生徒に教え込むことはやめてほしいと願っています」(三三〇ページ)という最後のお願いに結びつくのである。小松英雄氏がここまでお書きになるのであるから、読者に対するインパクトは強烈で、教室でどのように教えたらいのか、戸惑いを覚える国語科教員もおられることと思う。

私見によれば、「男もすなる日記」の「なる」が伝聞を表わしていることは明らかである。『土左日記』の日付が「漢字文の日記」と同じ形式になっているのはその形式を踏襲したもの、という小松氏のお考えを前提とするならば、次のような二通りの解釈があるかと思う。

一つは、単純に「伝聞」と解する考え方である。女性「作者」は、男性は日記というものを書くという話を「伝聞」したことになるのであるが、さらに、日記は日付のあとにその日の出来事を記すという形式を採ることをも「伝聞」して知っていたと考えれば、何ら問題はないように思う。

いま一つは、ジェンダー論の観点からの解釈である。作者紀貫之は『土左日記』の女性「作者」を、漢詩文にも関心を抱く進取的な女性として造形しているから、そのような女性であれば、男性の書いた日記を目にすればそれを手に取り、読んでみようとしたとしても不自然ではない。しかし、漢字や漢詩文は男性の領域に属するものであり、女性としては、それらについて知っていても知らないふりを装わなくてはならなかったことは、平安時代の文学や歴史を学ぶ者にとっては常識といってもいいだろう。『紫式部日記』によれば、式部は屏風の色紙形に書かれた漢詩を読めないふりをし、手紙には「一」という漢字すら用いなかったそうだが、そのような例を挙げるまでもなく、『土左日記』の中にも同様の例は存在する。

十二月二十五日の条に「守の館より、呼びに文もて来たなり」とある。事実を記録するだけならば、「来たなり」ではなく「来たなり」であつてもかまわないところだが、ここに伝聞の「なり」が使用されているのは、女性「作者」が使者の来訪の事実を伝聞したにすぎないことになっているからとも考えられる。^(注)しかし、新国守が前国守を送別の宴に招待するために、位階を有する官人同士の交際にふさわしい作法に従って正式な使者をよこしたのであれば、それは男性社会の有職故実にかかわることからであり、女性「作者」としてはその事実について伝聞の「なり」を用いて、女性とは縁遠い世界として記述した（ということになっている）のではなからうか。

十二月二十六日の条に「からうた、声あげていひけり」とあり、同二十七日の条に「からうたども、ときに似つかはしきいふ」

とあるのは、いずれも漢詩の朗詠についての記述であるが、漢詩の内容に言及していないからであろうか、伝聞の「なり」は使用されていない。ところが同じ二十七日の条に「船屋形の塵もちり、空ゆく雲も漂ひぬ、とぞ言ふなる」とあるのは、漢籍に依拠した男の言葉を聞き取り、記述しているのであるから、女性「作者」としては伝聞の「なり」を使用して、その聞き取りについて自信が持てないポーズを取らなくてはならなかったのである。一月二十七日条の「からうたに、日を望めば都とほし、などいふなる言のさまを聞きて」というのも同様のケースである。『土左日記』に見出される伝聞推定の「なり」については、ジェンダーにかかわるこのような例が注意されるところであり、冒頭文の「男もすなる日記」は、その最もわかりやすい例であるといえるかもしれない。

以上、二つの考え方を示したが、いずれを採るにしても、「男もすなる」の「なる」が伝聞の意であることに疑いはない。教室では従来通り、『土左日記』の冒頭文を例にして二種類の助動詞「なり」の違いを教えてもかまわないというのが私の結論である。ただし、「男もすなる日記」の「なる」について右の二つの解釈を着想し、『土左日記』の読みをわずかも深めることができたのは、小松氏による問題提起のたまものである。

おわりに

本稿で私は、『土左日記』の「女性仮託」を否定する小松英雄氏の著書を批判し、あたかも従来の「女性仮託」説を擁護するかのような文言を連ねてきた。しかし、実を言うと私は、小松氏とは全く異なった意味で、「女性仮託」説に反対なのである。詳細は拙稿「土左日記「船のをさしける翁」について―前国守（船君）像の確定へ―」^(注8)、「土左日記を読みなおす」^(注9)を参照していただきたいのであるが、私の考え方を一言で述べるならば、『土左日記』は女性主人公の日記という体裁で創作されたフィクションである、ということになる。

『土左日記』の作者が紀貫之であることに疑いはない。^(注1)そのため従来、『土左日記』を貫之の日記ととらえ、貫之は女性のふりをして『土左日記』を書いたとする、いわゆる「女性仮託」説が唱えられてきた。私は、貫之は女性のふりをして『土左日記』を書いたのではなく、日記を書く女性主人公というキャラクターを創造したと考えるものである。

私はこの考え方を前提として『土左日記』を読みなおしてみようと思うのである。たとえば最後の帰宅の場面は、女性主人公の家への帰宅であって、従来言われているような、前国守邸への帰宅ではないのではないか。この家で生まれたとされている亡き女兒は、女性主人公一家の娘であって、前国守の娘ではないのではないか。紀貫之が土佐国で女兒を亡くしたとする従来の常識には、何の根拠もないのではないか。このようなことを、拙稿「土左日記を読みなおす」では述べておいた。

注

- (1) 東原伸明「書評 小松英雄著『古典再入門』土左日記」を入りぐちにして「――をんなもしてみむとてするなり」隠されていた意味の発見―」（『日本文学』五六巻八号 平成一九年八月）。なお、本稿で引用する東原氏の説はこの書評による。
- (2) 熊谷直春「『土左日記』の女性仮託は誤りか―小松英雄氏の『古典再入門』土左日記」を入りぐちにして「批判―」（『文藝と批評』第一〇巻第一〇号 平成二二年一月）。なお、本稿で引用する熊谷氏の説は全てこの論文による。
- (3) 青谿書屋本の本文は萩谷朴編「影印本 土左日記（新訂版）」（平成二五年三月 新訂二四刷 新典社）による。なお、同本の親本である為家筆本も冒頭文が同一本文であることは、『弘文荘敬愛書図録Ⅱ』（昭和五九年二月）所収のカラー写真によって確認できる。
- (4) 菊池靖彦「物名」の特色と構造」（『一冊の講座 古今和歌集』所収 昭和六二年三月 有精堂出版）
- (5) 題は順に「たちばな」「からはぎ」「かはなぐさ」である。
- (6) 菊池氏は歌番号を誤記しているので、正しい歌番号（四二四、四二五、四五六）に改めて示した。
- (7) 拙稿「土左日記略注（一）」（『武庫川国文』第七十九号 平成二七年一月）にこの解釈を示した。

(8) 『武庫川国文』第七十八号 平成二六年十一月

(9) 『日本語日本文学論叢』第十号 平成二七年三月

(10) 『恵慶集』に「貫之が土左の日記」云々とあるのはその決定的な証拠である。

(とくはら・しげみ 本学教授)